

## ハタハタ資源増大に向けた取り組みについて

秋田県漁業協同組合 北浦総括支所 青年部  
副部長 鎌田 勝彦

### 1. 地域の概要

男鹿市北浦地区は、日本海に突き出た男鹿半島の北西側に位置している。国立公園である男鹿半島は風光明媚な観光地として知られ、「日本の夕日、百選」の一つに選ばれた入道崎を持つ景勝地や男鹿温泉郷を近くに有している。

また、全国的にも有名なハタハタの主産地でもある（図1）。

### 2. 漁業の概要

秋田県漁業協同組合北浦総括支所は、4地区（北浦、島、戸賀、五里合）から成り、組合員数659人（正402人、准257人）で構成され、動力漁船594隻が在籍している。

平成14年の水揚量は2,358トン、水揚金額8億7千万円で、主な漁業種類は大・小の定置網、さし網、一本釣などであり、特に、小型定置網によるハタハタに対する依存度が極めて高い地区である。

平成10年には水揚量2,346トン、水揚金額10億8千2百万円であったが、最近では資源の減少や魚価の低迷により、水揚量及び金額が減少傾向にある中で、今年は、更に、台風14号やクラゲの入網被害により、定置網やさし網漁業において大打撃を受け、水揚げが減少するなど、漁業経営はますます厳しい状況にある。

### 3. 研究団体の組織及び運営

当青年部は、昭和62年9月に漁具・漁法の導入と改良や部員間の親睦を目的に結成された。

役員構成は部長1人、副部長2人、委員3人、監事2人で、現在の部員数は29人で、平均年齢は42歳となっており、そのうち8人が指導・青年漁業士として活動している。

主な事業活動は、先進地視察研修や漁業まつりの実行、近年ではハタハタ資源の増殖に向けた取り組みも行っている。

運営費は、1人当たり5千円の年部費と臨時徴収金や事業収入などである。

### 4. 活動課題選定の動機

秋田県の魚である「ハタハタ」は、昭和40年代には13千トンから20千トン台の漁獲量があったが、昭和50年代の前半から急激に減少し、平成3年には、71トンまで落ち込んだ。危機を感じた漁業者は、復活を願って平成4～6年までの3年間、全面禁漁の実施に踏み切った。また、解禁後の平成7年からは、漁獲量制限を決めるなど、厳しい管理対策を実施しながら操業をしており、徐々にではあるが、ハタハタ資源は確実に回復してきている（図2）。

こうした中、青年部では、もっと早く資源を回復させるための方策がないか、自分たち

で何かできないかと考えていた。

そこで、定置網に産卵し厄介もの扱いされ、捨てられている網ブリコやしけで大量に浜に打ち上げられ、カモメの餌となっている漂着ブリコに着目し、そのブリコの有効活用による資源の保護、増大を図ろうとして取り組みを実施することにした。

## 5. 研究・実施活動の状況及び成果

青年部が最初に取り組んだのは、平成11年12月に定置網に産み付けられたブリコの活用である。網から取りはずしたブリコ約200kgを集め、手作りの網籠やホタテ養殖籠に収容し、北浦漁港内に設置されていたハタハタ中間育成用筏を利用して自然ふ化を試みた。しかし、籠にブリコを詰めすぎたことと、水通しが悪かったことから、ブリコが泥に被われ酸欠状態になるなど、ふ化前にブリコが腐ってしまい、残念ながら良い成果を得られず試験を一時中断していた(写真1~3)。

そうした中、2年前の平成14年12月中旬に、北浦地区の八斗埼漁港内と大增川河口周辺の砂浜の波打ち際に、しけで漂着した大量のブリコがびっしりと敷き詰められ、一帯はえんじ色になっていた。こうした状況は、私が小学生の頃の昭和50年代に見られた光景であったが、このまま放置するとカモメの餌や腐って悪臭の発生を招く恐れがあり、何とか活用しハタハタ資源の増大に結びつけたいものだと部員たちと話し合っていた。早速、緊急役員会において協議し、その結果、このブリコの回収と再度増殖試験を行うことが決定した。早々、2日間で延べ24人の部員が参加して回収作業を行い、704kg、約56千個のブリコを回収した。

回収したブリコは、ホタテ養殖籠20連に収容(1連当たり約35kgで約2,800個)し、平成11年に実施した試験での失敗の経験を糧に、外海との海水交流口を有し、水通しが良好な畠漁港内と戸賀湾内に設置されている養殖筏に垂下して管理するとともに、ふ化が終了するまで発眼率やふ化率などを継続的に調査した。その結果、発眼率とふ化率は80%台と好成績を上げ、約22,000千尾の稚魚がふ化したものと推測された。

その後、まだ水温が冷たい2月下旬に、水産振興センターの職員が戸賀湾で収容ブリコのふ化状況について潜水調査したところ、死卵が少なく、大部分においてふ化が終わり、数多くのハタハタ稚魚が垂下した筏の周辺で群れをなして泳いでいるのを確認した。これらの稚魚が資源への添加の一助になればと願うとともに、こうした取り組みが認められたのか、戸賀地区の漁師からは「魚は生まれたところに必ず戻ってくる」「戸賀湾にハタハタが大量に押し寄せて来ることを期待している」「来年は地区の漁師も全面的に協力するから規模を拡大して続けてほしい」との要望と励ましの言葉を頂き、今後の活動に勇気づけられる場面もあった。

さらに、昨年は12月25~26日の2日間にわたり、前年同様にブリコの回収と養殖籠への収容垂下作業を実施した。同作業に従事した参加者は従来の青年部員のほか、北浦総括支所管内の4地区のハタハタ漁業に関係する漁業者から成る延べ260人(昨年の10倍)が自発的に参加した。互いに協力しながら八斗埼漁港、野村漁港と湯の尻海岸の3カ所に分散して、漂着ブリコの回収に努め、約83.4トン(約3,300千個)を回収(前年の約120倍)したが、あまりに多い量のため、養殖籠へは収容しきれず、約80トンを軽トラック延べ220台に積み込んで北浦漁港まで運び、船で沖出ししてブリコを海に戻す処置を講じた(写真4~6)。

一方、残りの約3.4トン(約13.6千個)は前年の量の4.8倍、個数で2.4倍に当たるが、トラックで戸賀、畠漁港に運搬して80連(前年の4倍)の養殖籠に収容(1連当

たり約42.5kgで約1,700個)し、戸賀湾内と畠漁港内の筏に40連ずつ垂下設置した(写真7~9)。2月上旬頃にはふ化する予定であるが、発眼率とふ化率が前年と同じ80%台であれば、約87,000千尾の稚魚が誕生することになり、順調に生育して、数多くの稚魚が資源へ添加ができるように、部員一同念願しているところである。

## 6. 波及効果

ハタハタ資源増大に向けた青年部の地道な取り組みは、資源は有限であるので、自分たちが守り、育てなければという意識の中で行われたものであり、多くの地区のハタハタ漁業関係者や一般漁業者の理解と共感を得て参加という形になったことは、取り組みが評価されたものと確信している。

また、関心を持つ漁業者が多くなることは、当事者のみならず、家族や友人及び地域全体の意識の変化を促すことになるのではないだろうか。

## 7. 今後の課題や計画と問題点

ハタハタ資源は回復の兆しがあるものの、まだ低水準にあり、種苗生産による放流などの事業は必要である。

養殖籠を使用した自然ふ化事業の取り組みは、今後も資源が回復・安定するまでの間、漂着ブリコが存在する限り規模を拡大しながら継続して実施する計画であるが、規模を拡大した場合、場所の確保や実施海域における餌料量とふ化稚魚育成数量の問題の解決が不可欠である。

また、ハタハタは、産卵基質として海藻類に産み付けるのが通常であるが、藻場の減少などにより、産卵基質を確保できずに放産するなどで、その大部分のブリコが漂着している状況にある。そのため、産卵基質の確保と漂着ブリコを減す対策として産卵用の網の布設試験なども検討中である。



図1 北浦地区の位置図

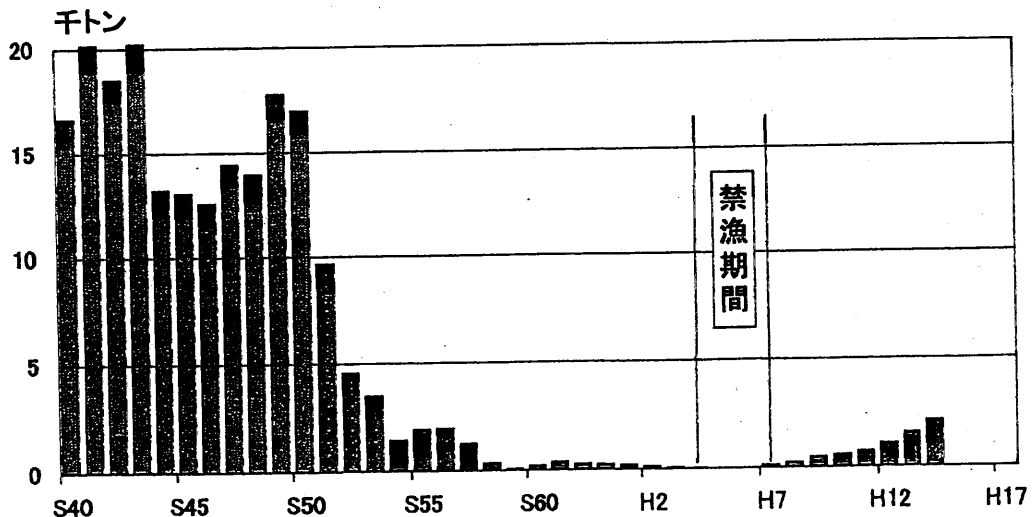


図2 秋田県のハタハタ漁獲量の推移

・ハタハタ漁獲量は昭和51年以降急減し、20年以上低水準状態が続いている。  
 ・平成7年の解禁後は順調に増加を続け、昭和53年以来、24年振りに2千トンを超えた

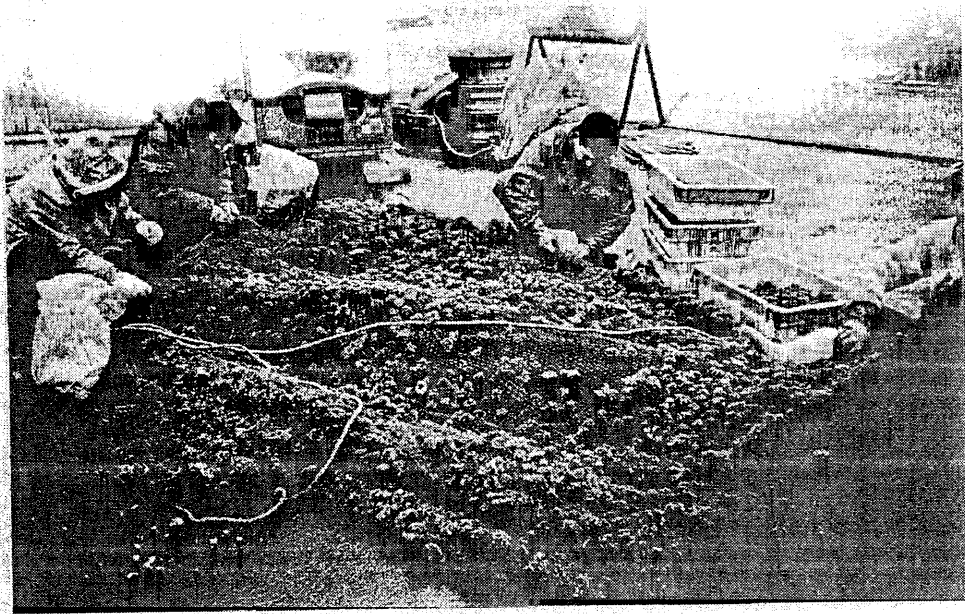


写真1 定置網に産み付けられたブリコ

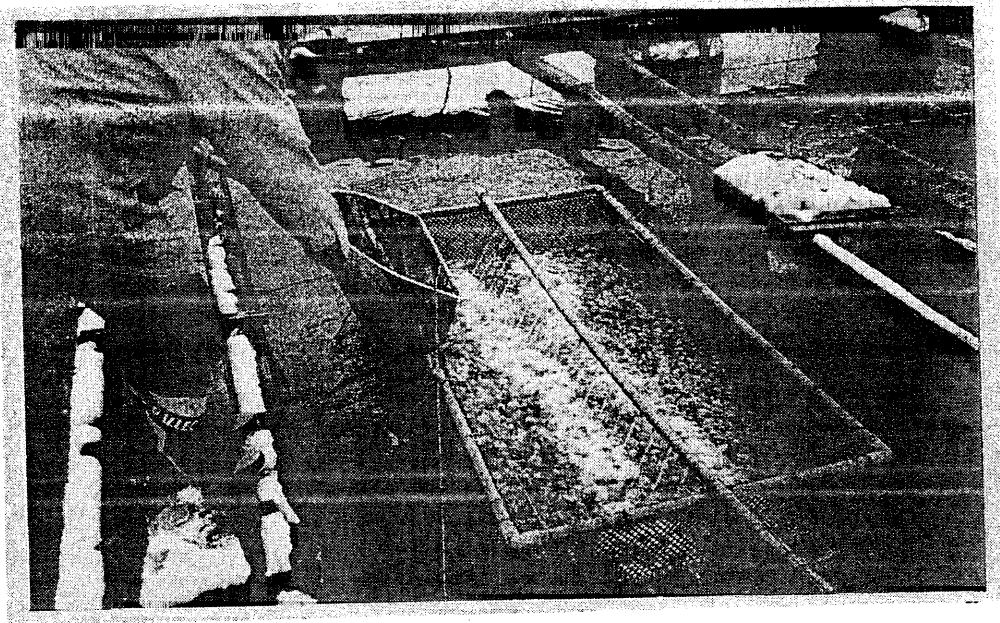


写真2 網籠に收容されたブリコ (増殖試験)

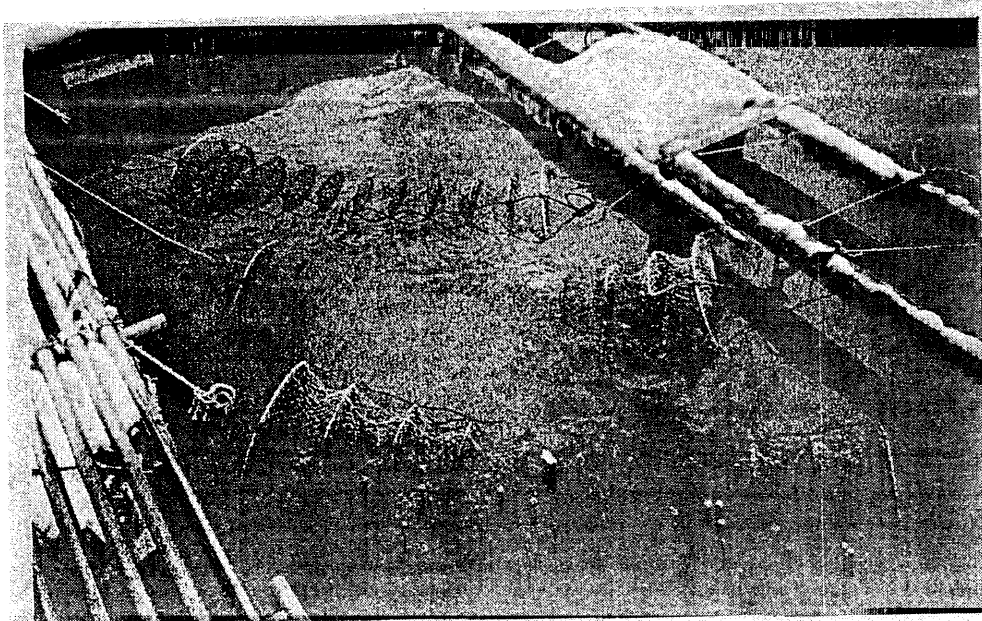


写真3 ホタテ養殖籠に收容されたブリコ (増殖試験)



写真4 漂着ブリコ（湯ノ尻海岸）



写真5 ブリコ回収作業（湯ノ尻海岸）

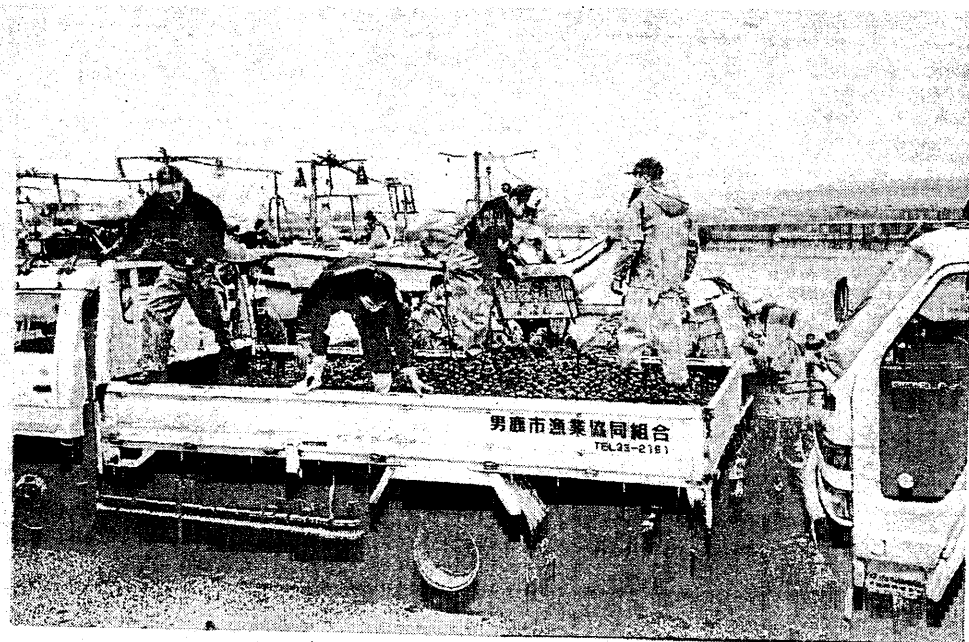


写真6 ブリコ トラックに積み込み

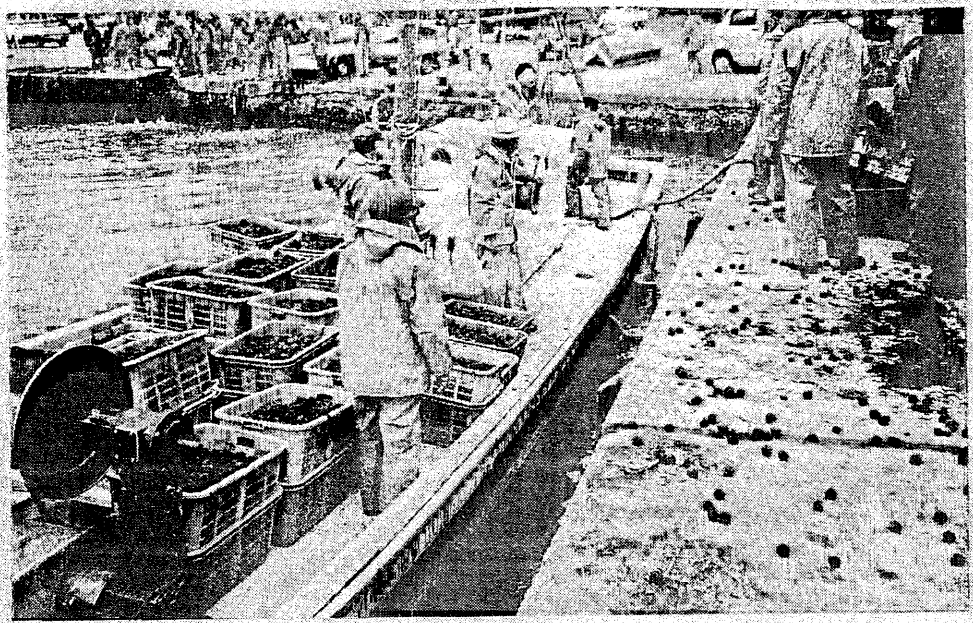


写真7 回収ブリコの船への積み込み（沖出して海に戻す）



写真8 養殖籠に収容作業中（畠支所前）

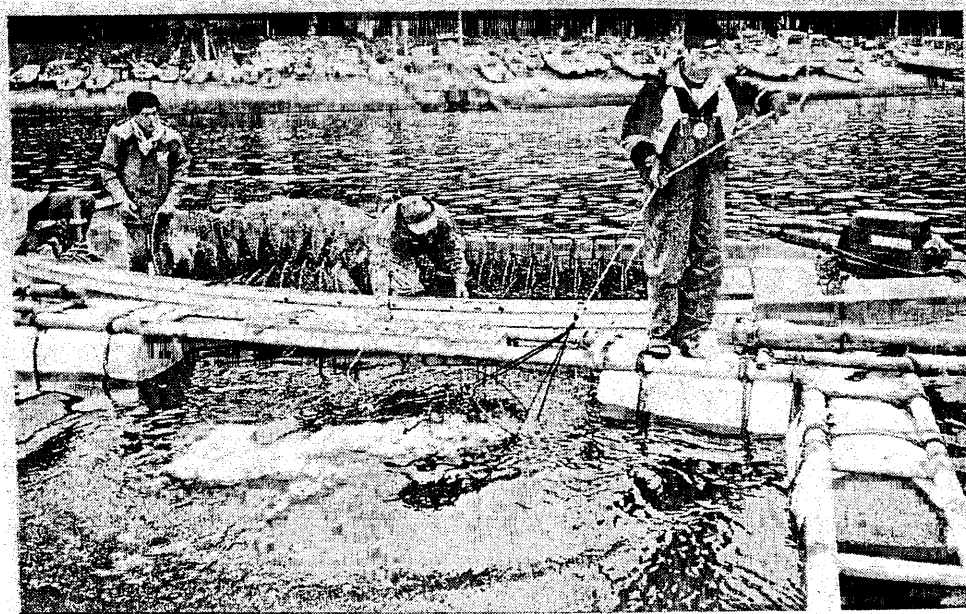


写真9 筏に養殖籠を垂下（畠漁港内）